

「やちくりけん」とパブリック・アーケオロジー

巖 由美

(シンポジウム実行委員)

1. 八千代栗谷遺跡研究会（やちくりけん）の活動を振り返って

八千代栗谷遺跡研究会（通称「やちくりけん」）の芽生えは、八千代市の栗谷遺跡の調査を担当した宮澤久史氏と整理に協力した高花宏行氏の「この成果をもとに何かしたい」という語り合い（「やちくりけん」創刊号*1 編集後記）と、2005年5月、八千代市遺跡調査会東部事務所で公開された栗谷遺跡の土器群に接した筆者との出会いからでした。そしてその年の12月10日八千代市郷土博物館での「栗谷遺跡出土遺物展」見学会への呼びかけに応じた参加者十数名により、常松成人氏を代表者として八千代栗谷遺跡研究会が発足し、「やちよ市民活動サポートセンター」にも団体登録、またインターネットでの情報発信のため「やちくりけんブログ」*2を開設しました。

発足当時、「市民とともに学ぶ印旛沼周辺地域の考古学」を活動のコンセプトに、「八千代市栗谷遺跡を中心とする遺跡群と土器などの考古資料の検討と整理を通じ、八千代市をはじめ地域の文化の振興及び文化財の保護を図る」ことが目的でしたが、同時に、栗谷遺跡の弥生土器には南関東系の土器や印旛沼周辺に見られる「臼井南式」の土器群とは異なる特性の土器があり、その型式（仮称「栗谷式」）設定への検討を深めることも大きな課題でした。

それらの課題を果たすために「印旛沼周辺の弥生土器」シンポジウムを開催することをめざし、故増尾伸一郎氏*3の指導で翌年1月に実行委員会を設立し、実行委員長には大塚初重氏、副委員長には熊野正也氏にご就任いただきました。

シンポジウム開催への半年間の準備は、栗谷遺跡とその土器型式の考古学的検討のために弥生後期土器の熟覧など専門家向けの研究会と、一般市民向けの遺跡見学会や学習会を頻繁に行い、参加者全員で栗谷遺跡の歴史的な背景やその環境を理解する機会を持ち、熟覧会で撮影した土器の詳細な写真を「やちくりけんブログ」*2に掲載して、土器研究の一助としました。

2006年、シンポジウム実行委員会は7月1日には一般市民向けの市民講演会「八千代は弥生文化の交差点ー栗谷遺跡の面白さー」、2日には研究者向けのシンポジウム『印旛沼周辺の弥生土器ー「臼井南式」と「栗谷式」ー』を勝田台文化センターで開催し、2日間で延べ335人が参加、その記録を『やちくりけん』創刊号*1として刊行しました。

その後も、八千代栗谷遺跡研究会として、北総各地の遺跡見学や学習会を開催し、会の発足から現在（2017年3月）までの活動は、シンポジウム実行委員会主催を含めて、遺跡見学・フィールドワーク29回、学習会・講演会の主催と聴講30回、土器などの遺物見学・熟覧会44回、シンポジウムの開催2回（述べ3日）、他団体で展示発表1回にのぼりました。

本誌2号で特集した公開シンポジウム「東国弥生文化の謎を解き明かす～佐倉市岩名天神前遺跡と再葬墓の時代～」は、2015年の秋から杉山祐一会員の提案を幹事会で検討し、2016年1月に事務局として佐倉市市民公益活動団体「やちくりけん佐倉」を、7月には、地域の自治体職員や大学院生など若い実行委員の参加も得て、シンポジウム実行委員会を発足させ、2017年2月19日に佐倉市民音楽ホールで開催し、391名参加がありました。

2. パブリック・アーケオロジー実践の場として

「市民とともに学ぶ印旛沼周辺地域の考古学」を目指して活動してきた当会の歩みを振り返ると、それは「パブリック・アーケオロジー」実践の一つの姿であったと思います。

パブリック・アーケオロジーについては、考古学研究者の視点からの市民へのアプローチという概念で、『入門パブリック・アーケオロジー』（松田・岡村 2012 *4）、最新では「現代考古学とコミュニケーションー日本版パブリック・アーケオロジーの模索」（岡村 2014 *5）などで、「考古学と社会との間の関係がどうあるべきか」を問うており、具体的・実践的な報告としては、五十嵐聡江が馬場小室山遺跡の実践*6 や香川県豊島での活動*7 を紹介しています。

筆者もかかわってきた馬場小室山遺跡を巡る活動は、遺跡の保存を呼びかける地元の教育者の飯塚夫妻と考古学研究者の鈴木夫妻と遺跡との出会いからスタートし、考古学研究ではシンポジウム主催や論文集刊行による縄文後晩期の環状盛土遺構研究の深化*8、創作では遺跡をテーマにした音楽・絵画の等の美術・映像・ジオラマ・マスコットキャラクター・ホームページなどの制作・環境と自然保護など市民による多彩な表現と発信*6 がなされ、遺跡見学会の開催、考古学協会講演会やさいたま市などの市民活動のイベントでの発表を行い、またその行動力は、2011年の東日本大地震で被災した岩手県山田町での文化財レスキューや郷土資料の整理などの支援、被災町民との交流へと発展しています。

八千代栗谷遺跡研究会では、「市民とともに学ぶ」という視点をもちつつ、一般市民にわかりやすい講演会や遺跡見学を行い、一方で地域の土器の特性などを分析する専門家向けの熟覧会を会の活動の両輪として行ってきました。

2006年のシンポジウムの際の趣旨説明で、大塚初重実行委員長は市民に向けて「考古学という学問に理解を示し、歴史的な考え方をしていただきたい」*1 と述べられました。この時のシンポジウムでは、地域性の強い弥生後期土器の型式設定について、また2017年の2回目は弥生の再埋葬についてと、研究者にも難解なテーマに挑戦しましたが、その準備過程では、過去の研究史や遺跡遺物に触れ、さらに若手研究者が新しい論証を創出していく過程を共に学ぶことで、考古学を専門としない参加者も含め、知識の普及啓発に留まらない考古学の実証的なプロセスを会得していったと思います。

発足当時の専門家向けと一般市民向けの両輪の活動は、やがて、地域の古墳や中近世城郭遺構、石造物なども対象として共に学び合う中で、あえて分けることはなくなり、共通の基盤に立って理解を深める学習の場となっていきました。

特に、2017年のシンポジウムの準備過程では、「市民と研究者がともに考えるシンポジウム」をめざしました。プレ講座の学習会の場では「講師から何を聴きたいか」を提案しあい、シンポジウムで明らかにすべき視点をプログラムに反映させ、明治大学博物館や佐倉市文化財収蔵庫での遺物の熟覧会では幅広い参加者の関心を集めました。さらに各参加者が自らその意義を伝えるべく、それぞれ関係する市民団体や施設、研究会などで、シンポジウムの積極的なPRを行い、当日は、市民主体とした事業として、予想を上回る聴講者数となりました。

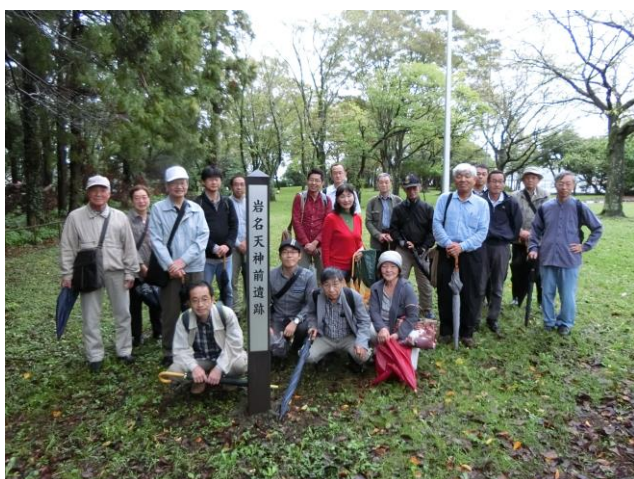
「パブリック・アーケオロジー」論では、「宣伝・アピールの対象の一般市民」と、「考古学と過去の関わりについて市民自体の主体性」の双方の意義と問題点を指摘*5 していますが、いずれも考古学研究者や行政の視点から論じられています。考古学を専門としない市民としての筆者は、「市民活動」の概念を「市民が自らの価値観、関心に基づき、自分たちの生活とコミュニティの貢献を目的に、自発的に行う活動」とするなら、パブリック・アーケオロジーもその活動の一つであり、その活動に必須な基盤は、科学的手法で構築される歴史学を共に謙虚に学ぶ姿勢であると考えています。

八千代栗谷遺跡研究会の活動は、現在、印旛沼周辺地域のフィールドワークを続けながら、考古学上の課題を見つけて共に探究する場となっています。会の名称も「やちくりけん」の通称のほうが、関係する市民団体や研究者に広く知られるようになりましたが、八千代栗谷遺跡研究会の名称には、発足当初に研究対象とした「栗谷

遺跡」探求への会員の思いが据えられていることに心に留めていただきつつ、今後とも「やちくりけん」の活動に若い方々が積極的にかかわってくださることを期待しています。

註・参考文献

1. 2007『やちくりけん』創刊号 八千代栗谷遺跡研究会
2. 「やちくりけんブログ」<http://yatikurike.exblog.jp/>
3. 増尾伸一郎 栗谷遺跡のある東京成徳大学の教授 2014年7月に逝去、専門は東アジア文化史、著書に『万葉歌人と中国思想』吉川弘文館 1997、『日本古代の典籍と宗教文化』吉川弘文館 2015
4. 松田陽・岡村勝行 2012『入門パブリック・アーケオロジ』、同成社
5. 岡村勝行 2014『神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報』6号
6. 五十嵐聡江 2013「パブリック・アーケオロジ再考」『実践パブリック・アーケオロジ』馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム
7. 五十嵐聡江 2012「パブリック・アーケオロジの可能性」『先史学・考古学研究』第23号 筑波大学
8. 鈴木正博・他 2007『「環状盛土遺構」研究の現段階』「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」実行委員会



2016.9.22 岩名天神前遺跡にて

2016.12.5 佐倉市弥富文化財収蔵庫にて
岩名天神前遺跡の縄文晩期終末期の土器の見学

